

# ZEPHYROS

1997年  
創刊号



国立西洋美術館ニュース

The National Museum of Western Art, Tokyo

## 目 次

### 特集 未来に向かって

新展示場 21世紀ギャラリー（仮称）	3
国立西洋美術館に期待すること	6
新国立劇場運営財団副理事長 遠山 一行	
西風のメッセージ	7
国立西洋美術館長 高階 秀爾	

---

'96展覧会リポート	8
------------	---

'97展覧会スケジュール	9
--------------	---

エッセイ 「上野の杜」発 ①	10
作家 森 まゆみ	

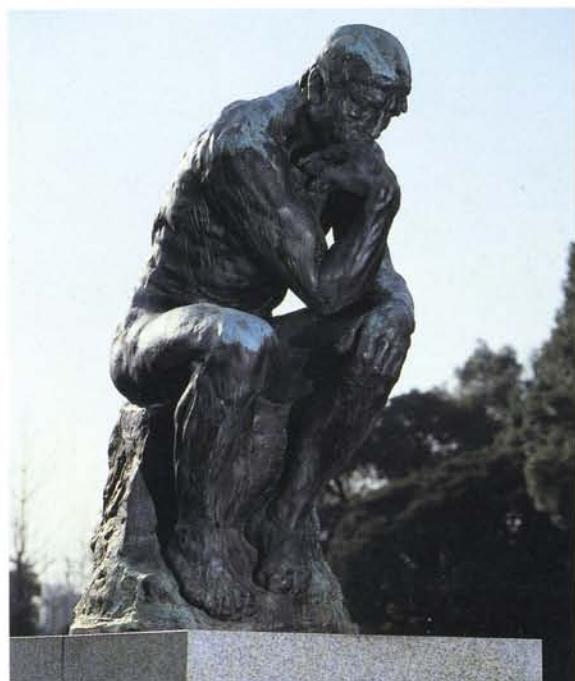
財団インフォメーション	11
-------------	----

ゼフェロスギャラリー	
------------	--

### 特集

### 未来に向かって

国立西洋美術館誕生から37年。  
まもなく新しい扉が開かれようと  
しています。  
21世紀を見つめ、未来に向かって  
国立西洋美術館が動きだしました。



# 新展示場 21世紀ギャラリー（仮称）

## 建設に至る経緯

国立西洋美術館は、フランス政府から寄贈返還された松方コレクション（印象派の絵画及びロダンの彫刻を中心とするフランス美術コレクション）を基礎に、西洋美術に関する作品を広く公衆の観覧に供する機関として昭和34年4月に発足しました。

以来、広く西洋美術全般を対象とする我が国唯一の国立美術館として、美術展事業を中心に西洋美術に関する作品及び資料の収集、調査研究、出版物の刊行等各種の事業を積極的に展開し、その役割を担ってきました。また、今日までの37年間のあいだに当館を訪れた人々は、実に延べ2,300万人を越えています。

当館も一つの永い美術館の歴史としてとらえれば、その創設期を終え、今まさに自らを振り返り改めて21世紀に向けての新しい展望を示す段階に至っていると強く認識しているものです。

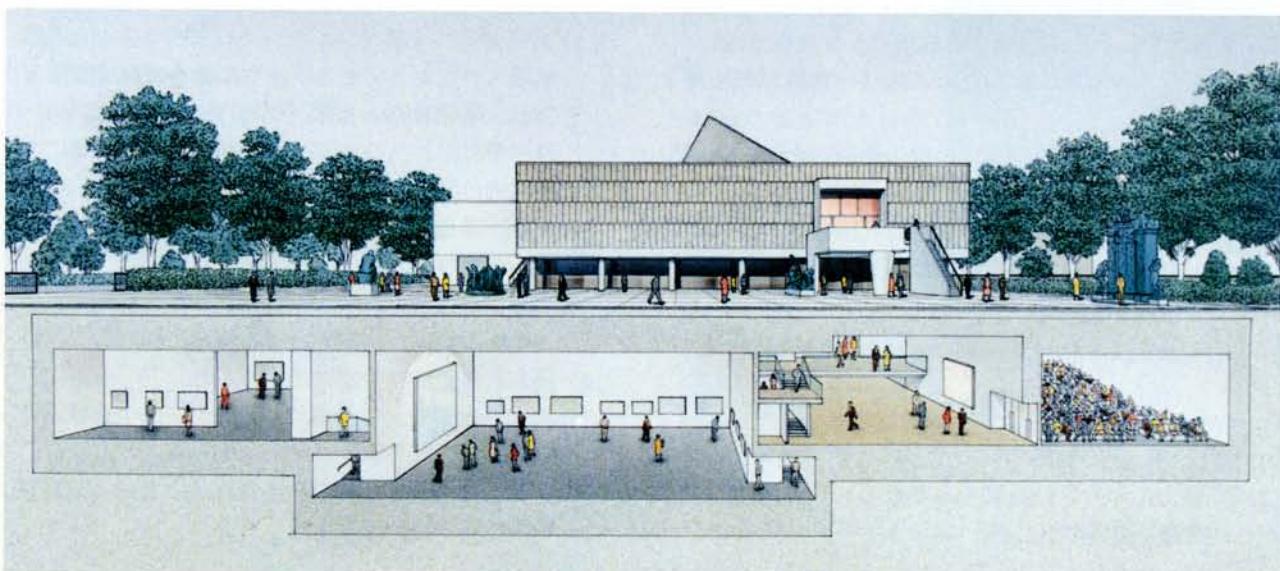
本来、美術館は「展示」「保存」「研究」「教育」「普及」「広報」「サービス」等の機能を兼ね備えた総合的な文化施設でなければならないといわれておりますが、この観点に立って当館の現状を考察すれば、財政、組織、収蔵作品等ソフト及びハードの両面において充分に満たされている状況にあるとはいえません。

特に、当館の現有施設・設備面における展示場、収蔵庫、研究教育施設が狭隘かつ経年による老朽化が著しいため、新たに特別展専用の国際水準に即した最新の設備等を完備したギャラリーを建設し、21世紀に向けた特別展、修復保存部門、美術資料部門、教育普及部門等を中心とした美術館活動のより一層の充実を図ることが永年の懸案事項となっていました。

このため、平成元年度に外部の有識者による国立西洋美術館整備調査委員会（委員長 河北倫明）を設置し、中長期的な立場に立った当館の整備計画について審議を願い、平成4年1月21日にその中間報告としての答申を得ていたものです。

その後、館内において本報告に基づく具体的検討を鋭意行ってきたところですが、時あたかも平成5年9月に打ち出された政府（細川内閣）の緊急経済対策としての社会资本整備計画に対応し、その実現を図るために、国立西洋美術館前庭地下展示場「21世紀ギャラリー」（仮称）基本計画を策定したものであります。そして、平成5年度第2次補正予算政府原案に計上されることになり、国会審議を経て平成5年12月15日にその実現を見るに至ったのであります。

ここに改めて、本計画の実現にご尽力いただいた文部省、文化庁、大蔵省はじめ多くの関係機関及び関係者各位に心から厚く御礼申し上げる次第です。

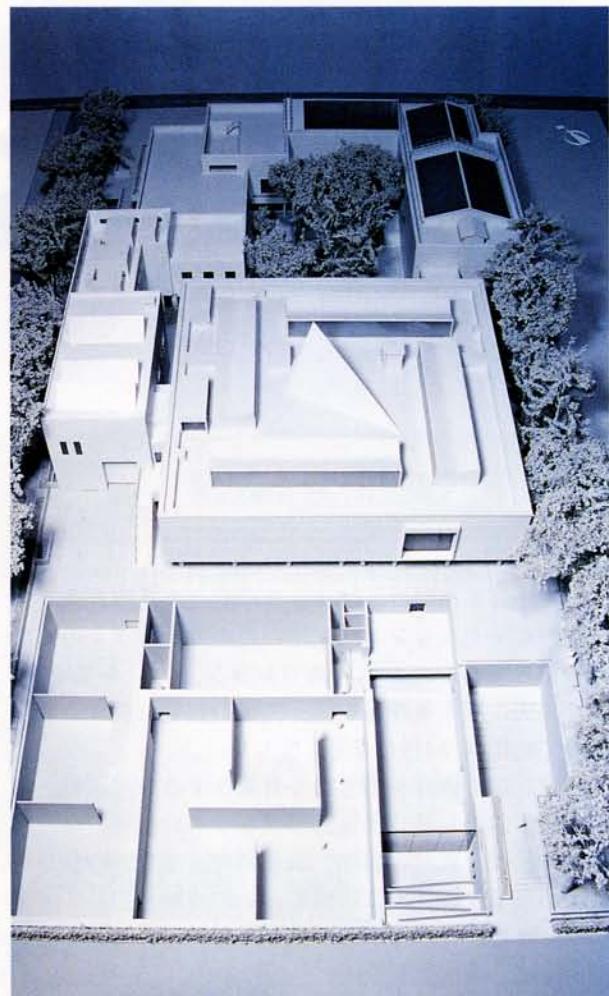


## 建設事由

- (1) 本館展示場は「松方コレクションを中心とした19世紀フランス美術」常設展示場としてきたが、松方コレクションの全作品を常時展示できるスペースを確保できない状態にあること。
- (2) 新館展示場は、創設以来34年間に亘って収集を続けてきたルネサンス以降の西洋美術と版画、素描等の作品の展示にあててきたが、近世以降の西洋美術史の流れを概観するには極めて不充分ながら、これらの作品はほぼ新館展示場を満たすほどの規模となり、特別展、共催展を開催するためにはこの新館展示場の常設展示作品をその開催期間中全て収蔵庫に収納して特別展示場に模様替している状況にあること。
- (3) 当館の収蔵作品を充実するためには、美術作品の継続的な購入をはじめ、一般個人や企業等からの美術作品の寄贈・寄託を得ることが不可欠であるが、現在これらを受け入れるための収蔵庫のスペース・機能は不充分であり、将来これらの美術作品を積極的に受け入れるために、国際的水準に即した最新の設備を完備した収蔵庫を設置することが必要であること。
- (4) 当館の研究・教育機能をより充実させるためには、研究施設の拡充をはじめ、東西美術交流資料研究センター（仮称）、修復保存や教育普及等に従事する学芸員の研修を行うための西洋美術研修指導センター（仮称）、美術図書館等の研究教育のためのスペース確保が不可欠であること。
- (5) 来館者のためのサービスの向上を図るために展示場のスペースはもとより、ミュージアムショップ、多目的ホール、ハイビジョン室、資料閲覧室、レストラン等の設備が現有施設設備では不充分であり、来館者の多様なニーズに応えられないこと。

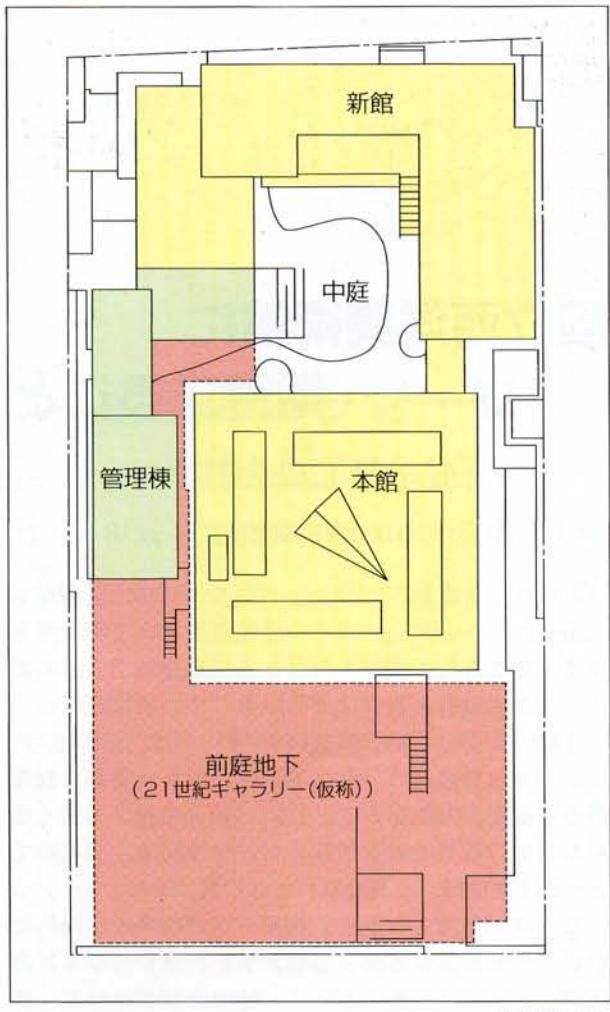
## 基本設計のコンセプト

- (1) 上野文化ゾーンの施設にふさわしい、来館者に開かれた空間を提供すること。



21世紀ギャラリー（仮称）模型

- 1) 前庭（彫刻広場）、ミュージアムショップ、レストラン等のサービスエリアを拡大し、来館者に広く開放できるよう配慮すること。
- 2) 高齢者、身障者の利用に配慮すること。
- 3) 周辺環境に配慮した建物とするほか来館者に親しまれる環境設備に配慮すること。
- (2) 本館、新館、21世紀ギャラリー等の各施設が機能的につながり、来館者にとってスムーズな動線を確保すること。
  - 1) 来館者が、本館エントランスロビーを中心に各展示場へアクセスできる明快な動線を確保すること。
  - 2) 館員、美術作品とともに、本館、新館、21世紀ギャラリーそれぞれへのスムーズな動線を確保すること。
- (3) 敷地内の既存施設との融和を図ること。
  - 1) 本館、新館との調和を考え、建物ボリューム、素材、色調等について、配慮すること。
  - 2) 21世紀ギャラリー建設に伴い、本館、新館が面する中庭を整備、完結させること。
- (4) 優れた性能を持つ建物とすること。
  - 1) 維持管理が安易で長期的な経済性をもつ建物とすること。
  - 2) 来館者、美術作品の安全を確保するため、耐震性、防災性等に特に配慮すること。



建設計画配置図

## 建設の概要

### (1) 規模

鉄骨鉄筋コンクリート造、地下3階、一部地上2階、延7,400m<sup>2</sup>

### (2) 工期

平成6年3月～平成9年11月（予定）

### (3) 総工費

約80億円（概算）

### (4) 設計・監理

建設省関東地方建設局・（株）前川建築設計事務所

### (5) 施工

建築 清水建設（株）

電気 （株）九電工

通信 浅海電気（株）

空調 東洋熱工業（株）

衛生 （株）城口研究所

### (6) 開館時期

平成10年9月

開館記念事業の第1弾として「クロード・ロランと理想風景画展（仮称）」開催（決定）

## 開かれた美術館をめざして

現在、当館の永年の念願であった新展示場（21世紀ギャラリー）の建設工事と併せてフランスの建築家ル・コルビュジエ設計による本館を免震化するレトロフィット工事を行っているところです。これらの工事も順調に進行しているところであります。工事が完了しますと当館の施設設備関係での大きな整備が完結する事となります。そして、当館は今年、開館以来37年が経過し、平成11年（1999）には満40歳を迎えます。その2年後の平成13年（2001）は、いよいよ21世紀の幕開けの年です。このように目前に迫った節目の時期に、当館ではこれまでの足跡を自ら省み、総点検及び評価を行い、その結果に基づいて21世紀に当館はどのように臨むかという観点に立って、21世紀将来構想を策定するため、平成7年8月に「21世紀構想検討委員会」を設置し、約1年間に亘って真剣に検討を重ね、平成8年9月に「西美からのメッセージ」と題する国立西洋美術館21世紀将来構想を刊行いたしました。

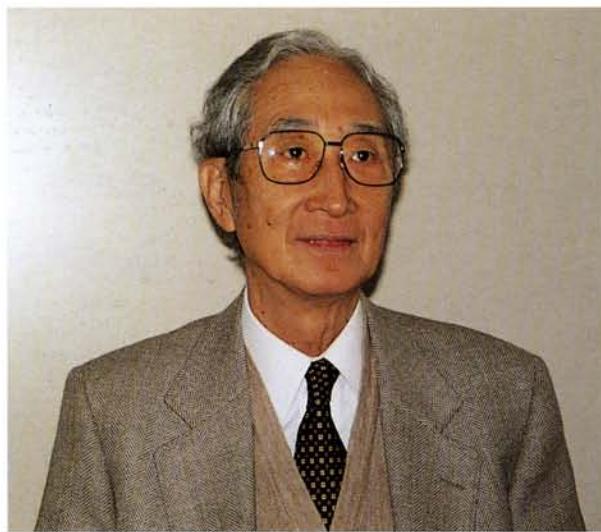
今後当館では、この構想に沿って、開かれた美術館を目指した具体的なアクションプログラムを立案し、実施することとしております。

これまでの見直し検討の中で、当館の37年間の足跡を、最初の20年間を「創設期」、続く17年間を「安定期」と位置づけてきました。この軌跡上に続くこれから20年間を「飛躍期」と位置づけたいと考えております。

終わりに、どうか多くの方々よりご叱責、ご助言を賜るとともに、今後とも引き続き当館へのご指導・ご支援を何卒よろしくお願い申しあげます。



国立西洋美術館



「ゼフェロス」の創刊を心からお祝いし、また歓迎します。

「国立西洋美術館」は、従来も貴重なコレクションと特別展で多くの美術愛好家に親しまれてきましたが、「ゼフェロス」の発刊は、それを助ける形で、私共の西洋美術についての教養を広め深めるのに役立つにちがいないと思います。

この創刊号の内容は新営工事中の新地下展示場「21世紀ギャラリー」（仮称）の紹介が中心になると伺っています。「国立西洋美術館」は、はじめの出発点に比べればある程度増設されて大きくなっていますが、その大切な役割を考えれば、まだまだ不十分なものといわなければなりません。新しいギャラリーの建設は正に時宜にかなったことと思っています。

いうまでもなく、美術館の本当の価値はその大きさにあるのではなく、その中身、つまりソフトの内容如何にかかっているわけで、コレクションの充実が何よりも求められていますが、その点ではお国、ひいては国民の広い理解と応援が必須の条件になります。

## 国立西洋美術館に 期待すること

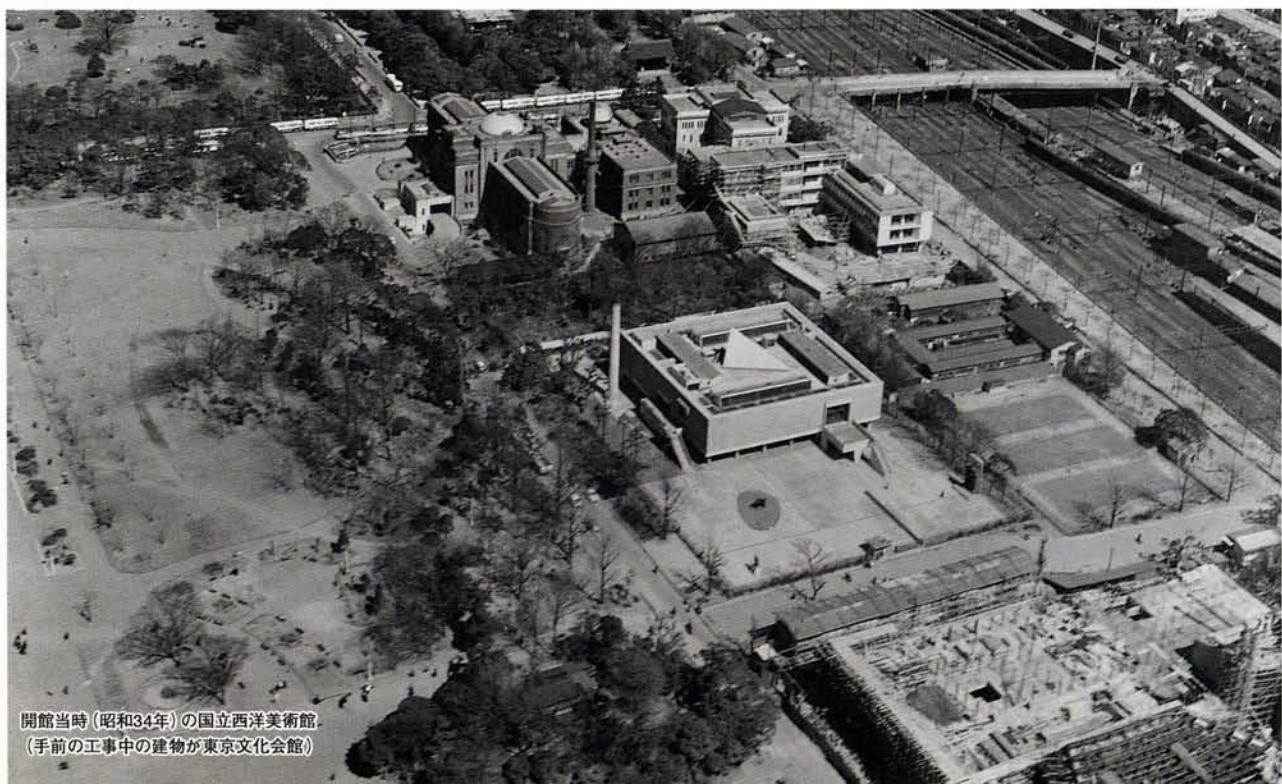
—新展示場完成を控えて—

新国立劇場運営財団副理事長 遠山 一行

私自身の希望をここでいわせていただければ、「西洋美術館」のコレクションはその出発点において印象派を中心とする近代美術がそのほとんどを占めていましたが、それ以前、あるいはそれ以後については正直にいって貧弱なものにとどまっています。「現代」のほうは、最近できた東京都の「現代美術館」によってある程度補われることになるでしょうが、「西洋美術」の長く豊かな歴史に私共の眼をひらくという役割は、どうしても「西洋美術館」が担わなければなりません。

ヨーロッパの古い美術を集めることは今では極めて難しいのは私にもわかっていますが、コレクションの急激な充実はともかくとして、特別展などの形で一従来以上に—そこに力をいれていただきたいと思っています。

私自身は、10年以上もつとめた「東京文化会館」の館長の職を最近退きましたが、上野の文化ゾーンの発展のために今後両館が手を結んで進むことを期待しています。



開館当時（昭和34年）の国立西洋美術館  
(手前の工事中の建物が東京文化会館)

# 西風のメッセージ

—21世紀に向けて—

国立西洋美術館長 高階 秀爾

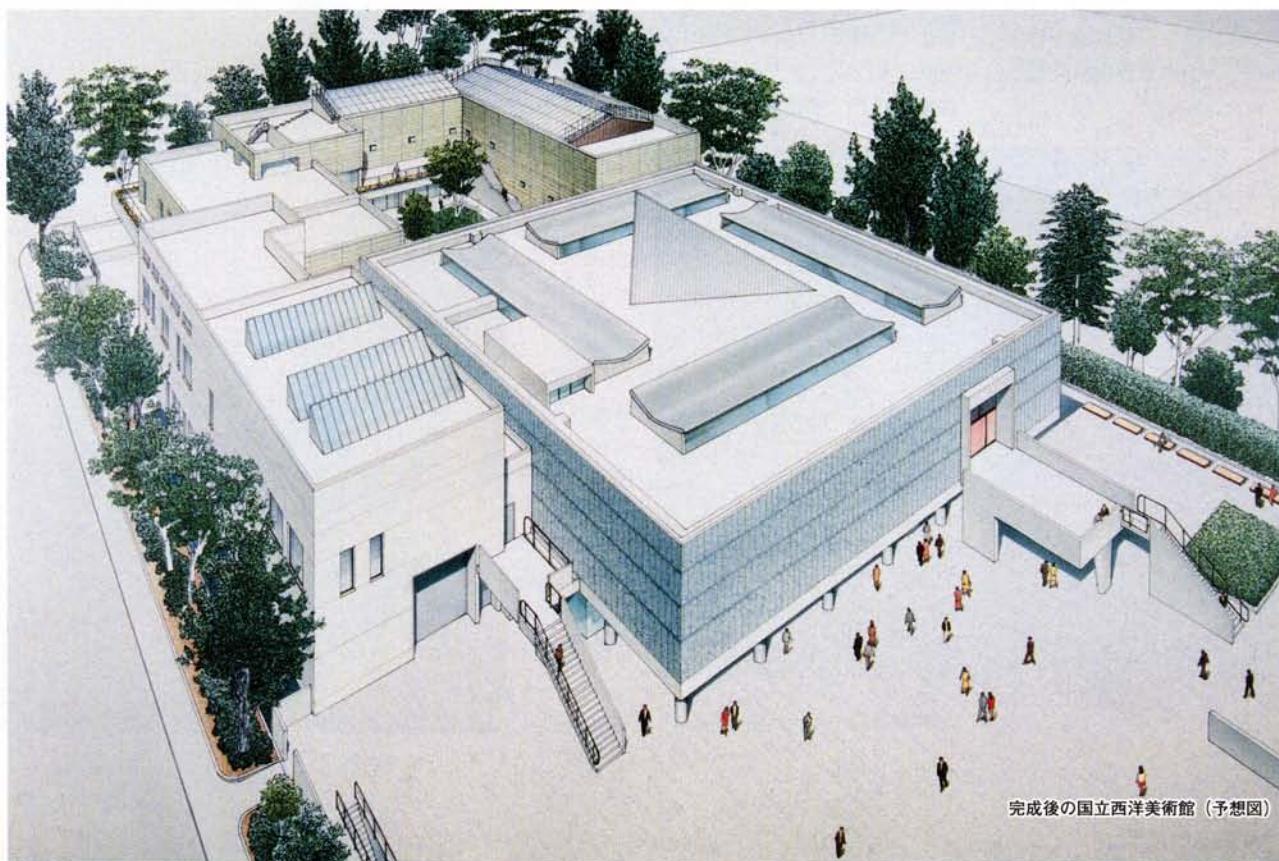
美術館が優れた美術作品を集めて展示するというだけの時代は、今では急速に過去のものとなりつつある。貴重な文化遺産の保存と公開が美術館の主要な役割であることはたしかであるとしても、それに加えて、一方では作品についての情報資料と保存修復の設備をそなえた研究センターとしての役割と、他方では社会のさまざまな層の人びとに対して文化活動に参加する機会や各種の知識を提供する文化センターとしての機能を持つことが要請されるようになってきた。この傾向は、余暇時間の増加、国際化の進展、生涯学習の拡大とともに、今後いっそう強められるであろう。美術館は、高い学問的水準を保った研究機関であると同時に、広く一般市民に対して開かれた出会いの場でもなければならないのである。

そのためには、国内外の専門家、愛好家、一般公衆との密接な連携が、美術館にとってきわめて重要なものとなる。多くの人びとの理解と支持を得てはじめ



て、美術館はその役割を充分に果たすことが出来るようになるからである。

このような認識に基づいて、国立西洋美術館は、その活動を広く一般に伝えるための広報誌《ゼフェロス》を創刊する。ゼフェロスは、古代ギリシャ神話における西風の神である。東洋においては、「東方風来満眼春」(李賀)と歌われているように、東風が春を告げる使者であるのに対し、西欧世界では、ボッティチエリの名作に描き出されているように、西風の到来とともに春が訪れる。当館は、現在、新展示場の建設と本館の補修工事のため休館中であるが、これらの工事が完成すれば、展示、教育においても、調査、研究においても、いっそう充実した活動を展開し得るよう、全館をあげて銳意準備中である。美術を愛するすべての人に贈るこの西風のメッセージに、強力な御支援を心からお願いする次第である。



完成後の国立西洋美術館（予想図）

## 子どものための美術展

# どうして像はつくられたの？

会場：東京国立博物館 入場者数：64,063人

会期：1996年7月2日（火）～9月1日（日）

待望の夏休みを目前にひかえた頃、元気いっぱい、子供たちが博物館へやってきた。正門に入ると、左手には埴輪の並ぶ表慶館、右手にはエジプトのミイラもみられる東洋館が待っている。けれど昨夏、ご両親や学校の先生方に連れられた子供たちの多くは、真っ先に、本館で開催中の展覧会「どうして像はつくられたの？」（国立西洋美術館・東京国立博物館共催）を訪れてくれたのではないだろうか。

ともに上野公園に建つ両館が保管する作品を中心に、洋の東西や制作時代を問わない立体造形ばかりをあつめ、「どうして？どこで？いつ？どのようにしてこの像はつくられたの？」の声に応えることができればと、いくつかのテーマにそって構成された展覧会。子供向けギャラリートークやサブ・プログラムを通じて、私たちにとって意外でユニークなたくさんの「どうして？」に出会うことができた。みた像の姿や私たちと交わした言葉が、子どもたちの頭の片隅に、今も残っていたら幸いだ。

東京国立博物館 研究員 後藤 文子



## 東京国立近代美術館・国立西洋美術館所蔵作品による 交差するまなざし

会場：東京国立近代美術館 入場者数：31,916人

会期：1996年7月20日（土）～9月8日（日）

国立西洋美術館と東京国立近代美術館による初の合同企画展「交差するまなざし」展では、両館の所蔵品127点が外光への関心、装飾性、細密描写、歴史画、マチエール、彫刻という6つの章に分けて展示された。しかし、普段見慣れているはずの所蔵品が新たな環境の中で今までとは別の輝きを放つて見えたり、西洋と日本の作品が実に違和感なく同居していたりなど、地味ながら発見も多い展覧会だったのではないかだろうか。実際、西洋と近代日本の作品が各章ごとほぼ半々の割合で出品されたので、直接東西の作風や表現を比較対照させながら鑑賞でき、作品自体の表現にひきつけられながら見ることができた貴重な機会であった。そのため、とかく難解になりがちな伝統と革新、受容と創造といった大テーマが根底に潜んでいたにもかかわらず、そうした難しさを意識せることもなく、数多く訪れた夏休み期間の子どもたちにも、美術や美術館に親しむよい機会を提供できたと思う。

東京国立近代美術館 研究員 都築千重子



## 国立西洋美術館所蔵 ロダン展

会場：萬鉄五郎記念美術館（岩手県東和町） 入場者数：6,247人

会期：1996年10月10日（木）～11月17日（日）

ロダン彫刻を前に小学生の一団に解説しているときのこと、「これロダンの指紋…？」「指紋だ！」「ロダンの指紋だ！」と子供たちの声、その声に促され眼を凝らす。確かにくっきりと指紋の跡がついている。

「考える人」に代表されるロダンの名声は世界的に高く、日本においても例外ではない。しかし、地方に住まう者にとってその実作品をまとまった形で目にする機会はそう多くない。このような現状を踏まえ、国立西洋美術館と地方の町立美術館との初の共催展覧会「ロダン展」が開催された。国立西洋美術館所蔵のロダン作品の中から、代表的な彫刻作品と素描・版画作品によってロダン芸術の多彩な展開を紹介したこの企画は、小学生たちが、新たな発見をとおして彫刻に宿るロダンの息づきを感じたように、ロダンの実作品にふれた多くの方々それぞれに忘れ得ぬ思いをもたらしたといえよう。

萬鉄五郎記念美術館 学芸員 平澤 広



## 国立西洋美術館展 愛と生命の響き

ルネサンスから近代への西洋美術の流れ

会場：新潟県立近代美術館（長岡市）

会期：1997年4月12日（土）～5月18日（日）

月曜休館、ただし5月5日は開館、5月6日は休館

国立西洋美術館が休館中の企画として、新潟県立近代美術館を会場に、西洋美術館所蔵のルネサンスから近代までの作品126点を出品いたします。新潟県立近代美術館の所蔵作品23点を加えて、絵画23点、彫刻10点、素描8点、版画108点の内容です。モネやルノワールの油彩画、ロダンの彫刻もさることながら、この展覧会の特色は、西洋銅版画の最初の巨匠マンテニヤから、デューラー、レンブラント、ゴヤ、ドラクロワなどを経てピカソの石版画にいたる、西洋版画芸術を通観できることにあります。新潟側から出品されるルネサンス木版画の傑作、バルバリの《ヴェネツィアの鳥瞰図》も見どころのひとつです。



マンテニヤ《海神の闘い》 銅版画

国立国際美術館開館20周年記念展

## 素材と表現—国立西洋美術館所蔵作品を中心とした展覧会

会場：国立国際美術館（吹田市）

会期：1997年4月17日（木）～6月22日（日）

水曜休館

国立西洋美術館のコレクションの主体は、絵画、彫刻、素描・版画です。美術家たちは常に様々な表現と技法を求めてきましたが、西洋美術の中で中心的な地位を占めていたのは、多くの場合絵画、彫刻でした。それに対して、素描・版画が美術の中に確固とした位置を見い出すのは比較的近代のことです。本展は、当館および国立国際美術館の所蔵する絵画作品と素描・版画作品を並列し、異なる素材に応じて、作家たちがいかに表現方法を変化させたかを美術史の流れの中で考える試みです。



セザンヌ《水差しとスープ容器》 水彩・素描

子どものための美術展

## 物語の主人公（仮称）

会場：東京国立博物館

会期：1997年7月1日（火）～8月31日（日）

月曜休館、ただし7月21日は開館、7月22日は休館

昨年に引き続き、東京国立博物館と共同で企画する子ども（小・中学生）を対象とした展覧会です。今回は、絵画における物語表現の面白さに注目しています。画家は豊かな想像力と変化に富んだ表現で、聖書、神話、お伽話、戦記物語などを様々なに描き表しました。本企画は、西洋や日本における絵画表現の多様性を紹介するとともに、絵を読み解く楽しみを味わってもらうものです。

出品作品は両館の所蔵作品からおよそ15点です。



ダフィット・テニ尔斯（父）《ヴルカヌスの鍛冶場を訪れたヴィーナス》 油彩



## 作家 森まゆみ

東京都文京区動坂に生まれる。  
早稲田大学政経学部卒業。

1984年地域雑誌「谷中・根津・千駄木」(愛称「<sup>やね</sup><sup>ね</sup><sup>せん</sup>千」)を創刊。

現在、「谷根千」の仕事をこなしつつ、新聞、雑誌、テレビ、講演と幅広い活動をしている。

著書に「谷中スケッチブック」「不思議の町根津」「読書休日」「明治東京騎人傳」「明治快女伝」「かしこ一葉」など多数。



上野の美術は寺の上にある。

上野の杜、不忍池を含めて三十六万坪は、江戸時代、東叡山寛永寺の境内だった。天台宗の寛永寺は、浄土宗の芝の三縁山増上寺と並んで、幕府の庇護した、江戸で最も格の高い寺であった。所領は一万石を越えた。

この寺は、徳川幕府と江戸の町を守るために、江戸城の艮(北東)の鬼門領として建立されたのだが、四代將軍家綱が葬られてのちは、徳川家の菩提寺ともなった。一説には寺を開いた天海僧正は、江戸の最北の岡、上野の山を江戸が攻められたときの軍事的要塞として寛永寺を作ったのだという。

確かにその予想は当って、幕府瓦解にあたり、二千とも三千ともいわれる彰義隊、すなわち幕府恩顧の者がこの山にたてこもった。高輪の薩摩屋敷での西郷隆盛、勝海舟の会談で、江戸は無血開城した、と私たちは歴史では教わるのだが、じつは旧暦五月十五日、半日とはいえ上野戦争は起つたのである。その年は閏年だったので、すでに梅雨に入り、その日は雨が降っていた。

明治維新後、上野寛永寺、そして谷中天王寺まで、彰義隊の分屯したこの岡は朝敵に与したとして新政府の憎む所となった。さしもの栄華を誇った堂塔伽藍は彰義隊あるいは官軍が火を放ち鳥有に帰した。寛永寺は下寺の僧も含め、所払いになり山を追われた。

広大な上野の山は政府に上地させられ、まずは大学病院にしようという案がもち上った。一説にはオランダ人軍医ボードワンの献言で、というが、この案には反対が多く、明治五年、太政官布告によって旧寛永寺は日本初の公園、パブリックスペ

ースとなる。一方旧天王寺境内は明治七年「谷中新葬地」として墓地になった。

そして上野には教育博物館(いまの国立科学博物館)ができ、動物園ができ、帝室博物館(いまの東京国立博物館)ができ、美術学校、音楽学校(いまの東京芸術大学)ができ、東京図書館(いまの国立国会図書館分館)ができと、急速に文化の杜としての性格を強める。国立西洋美術館、東京文化会館、日本学士院、東京国立文化財研究所、社会教育研修所も集まり偉容がととのった。

しかしいまでも、もと寺であった骨格は残っている。たとえば縮小された寛永寺はもとより、両大師、国立博物館の裏側にある寛永寺の塔頭や將軍の墓、東照宮、清水堂、お化け灯籠や時の鐘。門前町であった上野広小路から山を上っていく参道としての桜並木。噴水はかつての寛永寺の根本中堂跡であり、国立博物館の一帯が住職輪王寺宮の住居、御本坊である。

コルビュジエの設計した美しい西洋美術館で洋画を見たあとでも、公園口からすぐ電車に乗らないで、少し上野の杜を散歩してほしいと思う。これら江戸の遺構を感じてほしい。また、美しい西洋美術館のほかにも、芸大の赤レンガ談話室、山口半六設計の奏楽堂、片山東熊設計の表慶館、渡辺仁設計の国立博物館、前川国男設計の文化会館や都美術館、上野の山はさながら近代建築公園である。杜のあちこちには碑や銅像も点在している。

上野は四百年前から、あまり人は住んでいないにしろ、寛永寺の参詣から彰義隊、博覧会場、戦災・震災後の避難地、そして現在の美術展まで、とにかく人の〈集まる〉所なのは確かである。

# 人の集まる土地 ・ 上野



# 財団インフォメーション

## ◆西洋美術振興財団誕生

西洋美術振興財団は、平成7年3月31日に設立されました。その前身は、昭和34年6月、国立西洋美術館設置と同時に発足した「国立西洋美術館協力会」です。この協力会がその後、同館の事業運営の推進に側面から多大な貢献をしてきましたことはよく知られています。この協力会を財団法人組織とし、より一層の基盤強化を図ることが、関係者一同の念願でもあり、そのために歴代関係者各位は、多年努力を重ねてこられました。その努力が実って待望の財団化が文部大臣の許可を得られたところとなりました。



遠山文化庁長官（当時）から許可書をうける三角理事長

この財団は、旧協力会の事業を継承し、国立西洋美術館の支援を主にしながら、さらに西洋美術の普及や調査研究等の促進を図るなど、将来にわたり幅広い活動を通じて、わが国の美術の進展に寄与する目的をもつ公益法人です。今後ともこの財団の事業にご理解を賜り、皆様方の力強いご協力とご支援をお願いいたします。なお、財団では美術館活動を積極的かつ継続して援助くださる篤志の個人、法人各位に、賛助会員としてご加入くださるようお願いしております。年会費は、個人10万円、法人30万円（1口）です。援助してくださる各位におかれましては、事務局でお問い合わせくださいますようお願いいたします。

## ★ミュージアム・ショップからのお知らせ★

西洋美術館内のミュージアム・ショップは、ただいま閉店中ですが、下記商品は販売いたします。

### カタログ

「国立西洋美術館名作選」	1,700円
「ルーベンス調査報告書」（英文のみ）	4,500円
「宗教改革時代のドイツ木版画展」	2,000円
「描かれたふしぎな世界を旅する」	400円
「どうして像はつくられたの？」（東博共催展）	400円
「交差するまなざし」（東近美共催展）	2,200円
「ロダン展」（萬鉄五郎記念美術館共催展）	1,800円
「イタリア素描展」	2,500円

### テレフォンカード（6種・各1枚 800円）

モネ	「ウォータールー橋、ロンドン」
モネ	「睡蓮」
デ・ヘーム	「果物籠のある静物」
ロダン	「考える人（ロゴマーク）」
ナティエ	「ブルヌフ夫人の肖像」
クールベ	「波」

郵送ご希望の場合には、代金、郵送料、梱包料を現金書留でお送りいただきます。重さ、数量により郵送料が異なりますので、前もって事務局までお問い合わせください。

## ◆財団の会議と設立祝賀会

平成7年5月25日赤坂プリンスホテルにおいて、財団の理事会と評議員会を開催し、夕刻から関係者をお招きして、設立祝賀会を催しました。祝賀会では三角理事長が挨拶、臨席の遠山文化庁長官から祝辞をいただき、坂本科学博物館長の乾杯のご発声で、ご参会の皆さんで財団の前途を祝っていました。のち、懇談に移りましたが、当日ご参会の各位から、この財団に対しての期待の言葉が多く寄せられました。

## ◆役員・評議員等

(H9.3.1 現在)

理 事 長	三角哲生（ユネスコ・アジア文化センター理事長）
常 務 理 事	福原匡彦（山梨県民文化ホール館長）
理 事	浅尾新一郎（国際交流基金理事長）
同	鹿島昭一（鹿島建設取締役相談役）
同	酒井忠康（神奈川県立近代美術館館長）
同	櫻井孝穎（第一生命保険代表取締役社長）
同	椎名武雄（日本アイ・ビー・エム会長）
同	高階秀爾（国立西洋美術館長）
同	滝川精一（キャノン販売代表取締役会長）
同	豊田達郎（トヨタ自動車取締役相談役）
同	中江利忠（朝日新聞文化財団理事長）
同	橋本 徹（富士銀行会長）
同	福原義春（資生堂取締役社長）
監 事	行平次雄（山一證券代表取締役会長）
同	大谷利治（日本芸術文化振興会理事）
同	森脇英一（日本体育大学事務局長）
評 議 員	磯崎 新（建築家）
同	大岡 信（東京芸術大学客員教授）
同	金平輝子（東京都歴史文化財団理事長）
同	川口幹夫（日本放送協会会長）
同	後藤康男（安田火災海上保険取締役会長）
同	近藤道生（博報堂代表取締役）
同	佐治敬三（サントリー文化財団理事長）
同	高階秀爾（前掲）
同	堤 清二（セゾン文化財団理事長）
同	鶴田卓彦（日本経済新聞社代表取締役社長）
同	樋口廣太郎（アサヒビール芸術文化財団理事長）
同	平山郁夫（日本画家、日本育英会会長）
同	福田繁雄（グラフィック・デザイナー）
同	福原匡彦（前掲）
同	三角哲生（前掲）
事 務 局	渡邊恒雄（読売新聞社代表取締役社長）
	（局長）織井弘一（次長）池田節子

●財団評議員 青井舒一氏（東芝相談役）におかれましては、平成8年12月28日に急逝されました。生前のご指導に対し、深甚なる感謝を捧げ、謹んでご冥福をお祈りいたします。

## 編集後記

国立西洋美術館の広報誌を創ろう。編集長は君だ。編集委員は君と君だ。

ここまで渾身なく迅速に対応できた。もし、このスピードが保たれていたならば、もう3~4号は発刊できていたかもしれない。

なにせ素人集団である。雑誌社の本職のように素早い対応などできようはずがない。原稿をお願いした方々へも要領を得ない電話で、むしろ色々とアドバイスをいただくような始末。

玉稿をお寄せいただきました方々にこの場をお借りして厚く御礼申しあげます。

日本では東風が、西欧ではゼフェロス（西風）が吹くこの時期に、国立西洋美術館ニュース「ZEPHYROS」創刊号がなんとか間にあったことを編集委員一同素直に喜びたい。（お）



クロード=ジョゼフ・ヴェルネ

(1714-1789)

## 《夏の夕べ、イタリア風景》

1773年

油彩・カンヴァス 85×138cm

ヴェルネは18世紀フランスを代表する風景画家の一人。1743年から約20年間のイタリア滞在中、当時としては珍しく戸外で風景を直接写生・制作したといわれる。その画風は18世紀特有の華やかさをもちながらも、真実味のあふれた清新な描写を基調にしていた。本作品でも人物描写や自然観察にそうした特質が発揮されており、それはやがてバルビゾン派などへと受け継がれてゆくことになる。だが、画面右の岩と樹木。中心部の川と橋などは彼が良く用いる道具立てであり、遠景の町は幾つかの実景の組み合わせと思われる。



パオロ・ヴェロネーゼ（本名パオロ・カリアーリ）  
(1528–1588)

《聖女カタリナの神祕の結婚》  
1547年  
油彩・カンヴァス 84×100cm

ロミオとジュリエットの物語の舞台として知られる町ヴェローナは、古代ローマ時代に起源をさかのぼる北イタリアの古都である。作者ヴェロネーゼ（「ヴェローナの人」を意味するあだ名）は、この町で早熟な画家として青年期を過ごした後、近隣の大都市ヴェネツィアで活躍したルネサンス時代の代表的な芸術家の一人。この絵は彼の初期作品で、中心に描かれているのは聖母に抱かれたキリストと、かたわらにひざまずく年若いひとりの聖女である。彼女は初期キリスト教の殉教者カタリナ。キリストと婚姻を交わす神秘体験を持ったと伝えられるため、二人の結婚を表わした華やかな場面が人気の画題となった。画面の左下には二つのヴェローナ貴族の家紋が描き込まれており、この作品が現実の結婚の記念品として制作されたことを物語っている。



クロード・モネ

舟遊び

1887年

油彩、カンヴァス

145.5×133.5cm

● 誌名について

誌名「ZEPHYROS」(ゼフェロス)は“西風の神様”です。

ゼフェロスはギリシャ神話の神々のひとりで、西風を司る神様の名前です。西風は、日本では秋の風とされていますが、西欧では暖かさを運ぶ春の風をさします。

国立西洋美術館の所蔵作品は、ゼフェロスの吹く西風に乗って日本へやってきたのかもしれませんね。これからも皆さん的心に暖かい風を送り続けたい、そんな願いを込めて本誌の名前にしました。

ZEPHYROS

国立西洋美術館ニュース  
ゼフェロス

ZEPHYROS 創刊号  
印刷発行日 平成9年3月18日（年2回発行）  
編集 国立西洋美術館  
印刷 株式会社 稲元印刷  
発行者 財団法人 西洋美術振興財団  
〒110 東京都台東区上野公園7-7  
国立西洋美術館内  
TEL 03-5685-2122 / FAX 03-3828-5135